

令和2年度

鳴門教育大学ファカルティ・ディベロップメント
推進事業実施報告書

巻頭言

コロナ禍を授業改善の契機に

この原稿を書いている現在、新型コロナの第3波感染拡大の渦中にある。緊急事態宣言が関東や関西を中心10都府県で3月初めまで延長されることとなった。幸いにも、本学に感染者は出現していないが、年が明けて以降、大学入学共通テストに備え2週間のオンライン授業が実施された。今年度は4月～6月に初めて全学一斉オンライン授業が実施されてから、今回で2回目である。教員も学生もオンライン授業に少しは慣れてきた感があるようにも個人的には思えた。

さて、従来はFD推進事業として、学部・大学院での授業改善に向けて教員相互の授業参観や特別公開授業への参観を受けて授業研究会が全学態勢で実施されてきた。しかし、今年度はコロナ禍によるオンライン授業が年度当初から実施する事態となり、教員も学生も手探りしながらの状態でのオンライン授業に臨み、試行錯誤してきた。

以上のような経緯を踏まえ、1回目のオンライン授業を振り返り、オンライン授業の効果と課題を明らかにするとともに、今後のオンライン授業の在り方を検討しようとの趣旨でシンポジウムを企画することになった。

シンポジウムを企画している間にも、社会ではテレワークやリモートによる就職面接などが拡がったり、学校現場にはGIGAスクール構想によるICTを活用した教育活動への改革も進み始めたりした。新型コロナの感染拡大を機に、新しい生活様式(ニューノーマル)へといろいろな社会システムが変化しようとしている。教員養成を使命とする本学でも社会変化の後追いをするのでなく、これからの学校教育において、ICTを活用して教育活動が展開できる人材育成が求められている。そして、大学教育も然りである。

ここには、以上のような社会や本学の情勢を踏まえ、令和2年12月2日に対面及びオンラインで開催した令和2年度鳴門教育大学FD推進事業「オンライン授業研究会」のシンポジウムをまとめた。手前味噌ながら、このシンポジウムが、教員一人一人において2回目のオンライン授業に生かされたものと思っております。

この報告書が、これからのオンライン授業等において教員がさらに授業力を高めたり、学生が学びをより深化させたりする上での一助になれば幸甚に存じます。

学部・大学院ファカルティ・ディベロップメント委員会

副委員長 小坂 浩 嗣

令和2年度鳴門教育大学FD推進事業 「オンライン授業研究会」実施要項

1 趣旨と論点

新型コロナウイルス感染症の拡大という事態は、全国の教育の場におけるICTを活用した「オンライン授業」の必要性を顕在化させた。本学においても、オンライン授業は、これまでの個別的な取り組みを超えて、全学的に取り組まねばならない緊急の課題となったのである。

オンライン授業は、時間と場所に縛られることなく学生に教育内容を提供できるところに大きな特徴を持つ。しかし、いざ大学全体での実践となると、大学及び学生の通信環境を調査・確認することに始まり、教員や学生のICT活用スキルの熟達度の違いを前提に、同期・非同期、一方方向・双方向を類型の軸にしながら授業の形態ごとに適切な教材を開発すること、そしてその実践の教育効果とともにオンライン授業のために学生にかかる負荷の程度を適切に見取ることなど多岐に亘る課題や困難点が自覚されるようにもなった。オンライン授業の全学一斉の導入は、教員養成を目的とする本学における教育のあり方と質保証そのものを問い直す重要な契機となったといえることができる。

本年度のFD推進事業では、「オンライン授業研究会」として、本学における今年度のオンライン授業の実践を振り返り、その課題を明確にするとともに、次年度以降の本学の教育のあり方を展望しつつ、教員養成教育におけるオンライン授業の位置づけと意義、可能性について議論していきたい。議論のための主な論点としては、以下を挙げることができる。

- ①オンライン授業の特徴と問題点
- ②組織的にオンライン授業を実施する場合の条件整備や学生支援の課題
- ③効果的なオンライン教材の開発の手だて、授業実践の方法、そのノウハウの共有化
- ④オンライン授業の評価と改善

2 対象者 本学全教員

3 期 日 令和2年12月2日（水）16時00分～17時50分

4 会 場 講堂（Teamsにより講堂の映像・音声を配信）

5 プログラム

『教員養成教育におけるオンライン授業の可能性を拓く
～本学における実践の成果と課題を踏まえて～』

司会進行：梅津 正美 教授

- (1) オンライン授業の組織的展開に向けての本学の現状と課題
曾根 直人 准教授
- (2) 教員養成教育におけるオンライン授業の実践事例
 - ① オンデマンド動画教材の作成：注意した点と今後の課題
宮口 智成 准教授
 - ② 実技指導とオンライン（オンデマンド）教材との関係
山田 啓明 准教授
- (3) 学生のオンライン授業の受け止めと改善の方向性
幾田 伸司 教授
- (4) 質疑応答

6 日 程

時 間	内 容
16:00-16:05	開会挨拶（大石雅章理事・FD 委員会委員長）
16:05-16:10	趣旨と論点の説明（司会：梅津正美教授）
16:10-16:30	曾根直人准教授
16:30-16:50	宮口智成准教授
16:50-17:10	山田啓明准教授
17:10-17:30	幾田伸司教授
17:30-17:50	質疑応答
	閉会挨拶（小坂浩嗣 FD 委員会副委員長）

- 7 「令和2年度ファカルティ・ディベロップメント推進事業実施報告書」について
- オンライン授業研究会の報告書を作成し，FD推進事業実施報告書とする。

令和2年度 鳴門教育大学FD推進事業「オンライン授業研究会」

令和2年12月2日（水）16:00～

『教員養成教育におけるオンライン授業の可能性を拓く～本学における実践の成果と課題を踏まえて～』

（司会進行 梅津 正美 教授）

それでは、ご参会の皆さま、定刻になりましたので、只今より2020年度FD推進事業「オンライン授業研究会」を開催いたしたいと思っております。

私は、今回の司会を務めさせていただきます、FD委員会委員、社会科教育実践分野の梅津正美です。どうぞよろしくお願いいたします。まず、開会に先立ちまして、山下学長からご挨拶をいただきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

（学長 山下 一夫）

映像が映ってないということで、ちょっとホッとしてます。気楽にやりたいと思っておりますけども、一言、挨拶を述べさせていただきます。

毎回、私自身、時間の都合がつく限り参加しておりまして、先生方の熱心な取り組みを聞かせていただいて、例えばアクティブ・ラーニングについて大いに自分自身の勉強になると共に、本学の先生方を非常に頼もしく思っております。

今回も、オンライン授業の可能性についてという非常にタイムリーな企画でして、まさに小・中学校をはじめ、GIGAスクール、それから本学においてもコロナ禍における授業、更に今、四国5大学連携を進めておりますけど、その授業等々、本学が先導的に取り組みを進めていかねばならないところが多々ありまして、それに関して非常に先生方から色々なお知恵を頂けるものだということに思っております。

結びとなりますが、壇上の先生方をはじめ、本日の会を担当して下さっている教職員の皆さんにお礼を申し上げますと共に、みんなで勉強していきたいと思っておりますので、どうかよろしくお願いいたしますと思っております。以上で私の挨拶とさせていただきます。（拍手）

（司会 梅津） 山下先生、どうもありがとうございました。引き続きまして、FD委員会委員長、大石理事よりご挨拶をいただきたいと思っております。

（FD委員会委員長 大石 雅章 理事）

大石です。皆さんこんにちは。今日は16時からということで、遅くなって申し訳ございませんけども、どうぞ最後まで参加していただければと思いますので、よろしくお願い申し上げます。

5月22日から6月18日まで、オンライン授業という形で始めました。それで、その後もオンラインで進めている先生もおられると思っておりますけど、その後、対面も可となりました。

そこで、今年、何をすべきか考えた時に、FD推進事業として、せっかく我々オンラインで全学的にやってきた、その成果をどのように引き継いでいくのかというところで検証する必要があるだろうということで、今回は「オンライン授業の可能性を拓く」というようなタイトルで全体会をもつことになりました。

そして、その計画では専攻長がこのFD推進事業の委員になっておられますけれども、その先生方を中心に計画を練っていただきまして、今回、壇上で4人の先生方にご報告いただくということで、どうもありがとうございます。曾根先生、幾田先生、宮口先生、それから山田先生、本当にありがとうございます。

皆さん、今回参加していただいて、今、学長先生がおっしゃったように、今後こういうオンラインでの授業というのは更に推進されていくことになろうかと思っておりますので、先生方も今日ご参加いただく中で今後の教育に生かしていただければと思っておりますので、よろしく申し上げます。簡単ですが挨拶に代えさせていただきます。どうもありがとうございます。(拍手)

(司会 梅津) 大石先生、どうもありがとうございました。それでは早速、本会に入ってまいりたいと思っております。

最初に、私の方から簡単に本FD推進事業の趣旨を説明させていただきまして、併せまして今、大石先生の方からもお名前を紹介していただきましたけれども、担っていただく発表内容と関わりまして、私の方から登壇の先生方を改めてご紹介申し上げたいと思っております。

先ほどのお話の中にもございましたけど、5月・6月と本学はコロナ禍の中、全学でオンライン授業に取り組むという未曾有の事態と言いますか、初の経験をいたしました。先生方の中には既に随分とオンラインによる授業展開にキャリアを積まれた方もいらっしゃると思っておりますけども、多くの教員にとっては、戸惑いと不安の中で取組を始めたことだったと思っております。

その中で、教職員は元よりですけども、学生さんたちとも大きな不安やら困難を共有しながら、なんとか授業を実施してきたというのが実感です。

そのような思いの中で、私など典型的のかもしれないんですけども、早く対面授業になれば良いなど、決して教材づくりに手を抜いた訳ではありませんけども、どうしても心のどこかにオンライン授業は一過的なもので、やはり対面の授業を早くやりたい、というような気持ちは確かにありました。

対面授業の大切さとか意義というのは、もはや語るまでもないことかもしれませんが、しかし改めて考えてみますと、このコロナ感染症というのがすぐさま年が明けたら収束するという見通しもなく、オンライン授業というのは重要な大学の1つの授業形態としてこれから益々考えていかなければならない形態ではないかということは、皆さん共有されたところではなかったでしょうか。

それと更に言えば、コロナ禍が立ち去った後におきましても、GIGAスクール構想等が文科省から推奨される状況の中にあって、オンライン授業の形態と対面型の形態がこれから良い形でハイブリッド化していくということも、高等教育機関である大学においては重要なことではないかという風に考えております。

そういった事がFD委員会の中で議論する中、問題意識として立ち上がってまいりまして、本日の『教員養成教育におけるオンライン授業の可能性を拓く』という主題を設定しました。決してネガティブにこの形態の授業を捉えるのではなくて、本学の新しい教育形態としてまさに可能性を追求していこうという形で立ち上がった主題であります。

その中で議論をしていく訳ですから、4つ主要な論点というのを掲げました。1つはオンライン授業の特徴と問題点、2つに組織的にオンライン授業を実施する場合の条件整備や学生支援の課題、それから3つに効果的なオンライン教材の開発とその実践の具体的な手立ての方法、そしてこれを共有化していくための手立て、そして4番目としまして、オンライン授業の評価と改善、主要なこの4つの論点を掲げまして本会を組織し、4人の登壇の先生方にそれぞれ課題を担っていく形で発表いただくことになりました。

今、私が申し上げました1番と2番について、主として曾根先生からご発表いただきます。それから3番につきまして、宮口先生と山田先生にご実践の成果をお話いただきます。そして最後に、大学院教務委員会の副委員長である幾田先生の方から、オンライン授業の評価と課題というテーマについて、ご発表いただくことになっております。このような趣旨で本会を展開してまいります。

それでは早速ですが、曾根先生からご発表いただければと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

(1)「オンライン授業の組織的展開に向けての本学の現状と課題」

(曾根 直人 准教授)

情報基盤センターの曾根です。「オンライン授業の組織的展開に向けての本学の現状と課題」ということで、資料を作っています。

まず今回、全学的なオンライン授業を展開するというのが急遽決まって、何を使おうかということで、使ったのは moodle です。皆さんも既に利用されているのでご存知だと思いますけども、オープンソースの moodle というものを使っていて、非常にこれ、皆さん使いやすいという声もかなり聞かれたのですが、世界中で利用されていて、広く使われているソフトです。こんな感じですね。日本国内で moodle のサイトに登録されている数ですけれども、それだけでも 1,250 あって、登録されていないのも含めれば、もっと国内でも使われていると思われれます。こういうものを選んで立ち上げました。

実は、この春に moodle を立ち上げる前にも、実は学内でひっそりと moodle を立ち上げてまして、初期の頃は 2005 年頃ですかね。基盤センターが開設している学部の授業で「基礎情報教育」、「実践情報教育」というもので使うために、2005 年頃から使っていました。これはあまり宣伝もしていなくて、センターの中でひっそりと使っているような状態だったんですけども。

それから、2011 年頃に ek4 とか知プラ、今は知プラになってますけども、大学間連携で単位互換しようということで、そのプラットフォームとして moodle を使おうということで、2011 年から一部の教科で使うのが広がっていました。

更に、2018 年からは知プラと遠隔ですかね。遠隔で使っていた LMS というもの、外部の LMS を使っていたんですけども、それを第 7 期の情報基盤システムが立ち上がるのと同時に moodle に移行していました。それから今年の授業という形で、moodle の利用、もう 5 年ぐらい前からスタートしていました。

今、実は学内に moodle が 3 つあります。moodle は役割によって 3 つあって、なかなか混乱しそうなので、ちょっと色の名前を付けて分けています。あまり今のところ一般的じゃないかもしれませんが、知プラ+遠隔で使っていたやつを moodle orange で、<https://lms.naruto-u.ac.jp/>というので使えるもの、オンライン授業用が moodle blue で、<https://mdl.naruto-u.ac.jp>。あと最近、国際+免許更新用に新規にもう 1 個 moodle を立てて、moodle lime と付けてみました。

なぜ 3 つあるのかというと、ユーザー認証方式がそれぞれ違って、知プラのものは連携している大学、他大学の学生も使える、学認と呼ばれる大学間の認証連携システムに対応してます。学内の moodle blue ですね、こっちは学内認証基盤 (Active Directory)、皆さんが office365 とかに接続する時の ID パスワードと同じものでログオンできるようになっています。国際と免許更新用は学外の人が主に使うので、学内の認証システムとは連携させずに、独自の ID パスワードを発行するようなものとして作っています。ちょっと利用する人たちが少しずつ属性が違うので、こういう風に 3 つ立ち上がっているという状況です。

利用実績、これは moodle blue ですね。オンライン授業を立ち上げた時の利用実績ですけども、調べてみるとこんな感じです。横軸は週ですね。だいたい立ち上がったこの辺が 4 月末とか 5 月辺りだと思うんですけども、このグラフ、縦がコース数ですね。この週に何個、コースが立ち上がったかというのを示しています。最初、初期に一斉にオンライン授業が始まったので、すごい勢いでコースが立ち上がって、そのあとしばらく新規のコースというのは少ないんですけども、また後期に向けてコースが立ち上がっています。後期のコース、少し少ないんですけども、実は moodle のバージョンアップをした時に moodle がバグっていて、教員の先生は皆さん、コースクリエイターという設定をしていたんですけども、それがちょっと外れてしまって作れない状態になっていたんで、少し少なくなっていると思います。今は直りました。

アクセス数の推移ですね。アクセス数の推移もこのようになっていて、これは単純なアクセス数です。オンライン授業をやっていた週、前期の辺りというのは非常にアクセス数も多いです。このオレンジのと

ころは週末です。週末だけ色を変えました。こんな風にかなりあって、1日多い日だとこの1万2000、1万を超えるぐらいのアクセスがありました。こうして見ると前期はすごく多くて、夏休みに減って、後期もちょっと減っている感じなんですけども、ユニークユーザを見るとこんな感じになります。アクセスの総数は減っているんですけども、アクセスしてるユーザー数というのは実はそんなに減っていない。なので、後期に入っても moodle を使われている先生も結構いて、学生が moodle にアクセスしている人がかなりいるということがわかります。

これは日曜日から土曜日まで、時間ごとにアクセス数をトータルで調べたグラフです。昼間の時間帯をブルーで塗っています。こんな風にずっと月曜日から金曜日まで、昼間はそれなりにアクセスがあるんですけども、○で囲っているのはちょうど12時前ぐらいですね、土曜日以外は日が変わる直前にアクセス数が増えているというのがこれを見るとわかります。これは、おそらく moodle の締め切りが標準で時間設定すると、0時にレポートの締め切りが設定されてしまうので、おそらく締め切りの設定が0時なので、その直前に学生が提出しようとして、アクセスしているんじゃないかというのが出ていていると思われま

す。moodle の利用ですけど、最初はすごく履修で問題があったんですけども、これをなんとかできないかという話が皆さんも気になっていると思うんですけども、これは LiveCampus 側で改修が必要で、LiveCampus と moodle で同期するための設定、仕組みというのを入れないと現状では自動的に履修登録することができない状況です。これは今後の改善項目としてあります。

使い方も具体的な使い方の例がなかったんですけど、先ほど見てもらったように締め切りが標準設定のままだと深夜になってしまうので、もうちょっと早目の時間帯の方がいいんじゃないかと思います。見てすぐ採点する人もいないと思うんですけども、18時とか19時あたりに設定していただくと、たぶん学生も使いやすくなるんじゃないかと思います。

moodle だと提出したレポートにフィードバックを返すこともできるんですけども、学生の様子を見るとフィードバックが返されると結構喜んでます。最近、これも最初はできてなかったんですけども、途中でちょっと細工をして、ワードとかで出したファイルが PDF に変換されて、小学校の先生とかがよく使うスタンプ、花マルとかあるんですけども、そんなスタンプを押して返すとかも、今は使えるようになっています。

チャットはすごくシステムの負荷が大きくてダメだということで、チャットを使う時は Teams のチャットを利用してください。保守・サポート、これがちょっと問題で、急遽立ち上がったので、今サポート契約なしでやっています。バックアップとかもシステム的にはやっているんですけども、できれば担当教員、それぞれのコンテンツのバックアップは、やっていただきたいと考えています。

学生からの意見もまた後で出てくると思うんですけども、ちょっと聞いたところ、授業によってレポートの設定ですね、締め切り後、受け付けられるのかどうか、提出が1回だけなのか、締め切りまでは何回でもアップデートできるのか、設定が教科によって異なるので混乱している。評価が見られるコースと見られないコースとがあって、何らかの統一的なガイドラインがあった方が良くないかなと思います。

動画もですね、これからあとで山田先生がストリームの紹介もしてくれると思いますけども、基本的には動画はストリームに挙げてください。学外利用者はストリームを使いにくいので、メディアサイトというシステムもあるんですけども、ちょっと容量の問題もあって今は使いづらいです。外部サービスの Vimeo というのをを使うと、これはちょっと有料になっちゃうんですけど、学外への配信もやりやすいので使ってもらっています。この辺、動画の制作とかはちょっと細かい話なんですけど、動画も普通にパワーポイントで今は作れるんですけども、ちょっとデータが多いんですが、ここに書いてあるような方法でものすごくデータのサイズ、10分の1ぐらいに落とすことができたり、音のレベルの調整というのもできます。

ネットワーク環境の改善の要望が結構、センターにあります。で、学生宿舎が使いにくいとか、品質が

悪いという話があったんですけども、これは7月から民間の光ファイバー回線の導入が始まっていて、学生さんは月々のプロバイダ料金を払わないといけなくなったんですけども、払うと今は光ファイバーが寮にも入っていて、回線の状況は改善しています。

もう1つ、学内のWi-Fiです。今サービスを提供しているんですけども、これも10年以上前に整備されたんですけども、当時と比べてすごくWi-Fiを使う端末が増えていて、ちょっと容量が追い付いていないのでご迷惑をお掛けしているんですけども、今年中にアクセスポイントの増加だったり、最新規格のWi-Fi6に対応したものに更新予定です。工事中、たぶんご迷惑をお掛けすると思うのですが、ご協力をお願いします。

Zoomを使いたいという話で、これも今Teamsも当時と比べてかなり色んな機能が改善され続けているので、是非Teamsも使ってみてください。Zoomもいくつかの有償ライセンスが学内にもあるんですけども、これを効率的に使っていく方法というのを考えていて、どうしてもZoomが必要な授業もあると思うので、なんとか使えるようにできないかな、ということを考えています。

moodleのような学習管理システムですね。こういうのは対面の授業でも例えばレポートの提出だったりとか、授業資料の配布ですね。というのは非常に楽にできると思いますので、役に立つと思っています。2年生とか配属体験とかで休まないといけない、実習に行っても授業に出られない学生もいたりするので、その人たちに資料を提供したりとか、レポートを出してもらったりするのにも役に立つので、対面の授業になっても使えるので、是非今後も使っていただきたいと思います。

先ほども言いましたけども、ネットワークの問題、Wi-Fiが特にですけども、ご不便をお掛けしていると思うのですが、先ほども言ったように今年中に工事をして、一新する予定なのでご協力をお願いします。それと、Wi-Fiがどうしても、いくら増設してもチャンネル数に制限があって、勝手にアクセスポイントをたくさん立てられると、どうしても干渉してパフォーマンスが出ないという状況になってしまいます。是非、また整備が始まったらですね、またセンターの提供するWi-Fiで済むのであればそれを使っただいて、個人のAPを廃止するとか、出力をちょっと下げるといような形での協力をお願いしたいと思います。以上です。

(司会 梅津) 曾根先生、どうもありがとうございました。それでは引き続きまして、実践例ということで、宮口先生にご発表いただきたいと思います。よろしく願いいたします。

(2)「教員養成教育におけるオンライン授業の実践事例」

①オンデマンド動画教材の作成：注意した点と今後の課題

(宮口 智成 准教授)

数学の宮口です。全画面にならないようなので、このまま発表をさせていただきたいと思います。オンデマンド動画の教材作成についてお話をします。かなり教科に依存する部分が多いかなと思うのですが、参考になるところがあればいいなと思っています。

内容のアウトラインですが、具体的な作業の内容に沿って説明していきたいと思います。最初は、①スライドの作成から始まりまして、②動画の作成、③講義後の作業という順序でお話をしていきます。

まず、①スライドの作成からお話をします。スライドの作成は数学の場合、数式をたくさん打ち込まないといけけないので、TeXというソフトを使ってPDFファイルを作成しています。ちょっとわかりにくいですが、TeXでPDFファイルを作成して、それをスライドに使って授業をしています。

では、実際に注意した点について説明をしていきます。1つ目ですが、電子データは検索がしやすいというメリットがあるのですが、全体像を把握するというのはなかなか難しいという点があると思います。

数学の場合には、特に全体の系統性を把握、理解するとか、体系的に理解するとかいうことがかなり重要なポイントで、そういう意味で電子データを使って数学の授業をするというのはかなり難しい事だと思います。

そこで、その点は少し工夫する必要があったので、その授業の内容、構成をしっかりと作るということをやりました。具体的には、章ごとに1つのPDFファイルにまとめるということと、章の中にはいくつかの節があるのですが、このスライドの上のところ節のタイトルを入れることで、前後関係、前に何を勉強して、これから何をやるのかということがわかるようにしてあります。あとは、一番細かな単位としてはトピックというのがありますが、トピックはできるだけ1つのスライドにまとめるという風にしました。スライド上部の、この目次のようなところ、黒丸をしているところが今現在やっている内容ということで、現在置も把握できるようにしました。

それから、作成時の注意点の2つ目ですが、例えば論文を読む時とかに、その読みたい論文を読むためにまた別の論文を読まなくては行けなくて、それを読むためにまた別の論文が…となってくるとなかなか理解が進まないということがあると思います。授業でも同じようなことで、できるだけそのスライドだけで授業が理解できる、受講できるという風になるように工夫をしました。一応テキストもあるのですが、テキストは見なくてもスライドだけで受講できるようにしました。但し、文献を調べること自体が非常に重要な訓練、能力なので、この点は教科に依存するところかな、と思います。

3点目は前期はあまり気にしていなかったのですが、後期から注意するようになった点です。こういうグラフをカラーで出したりするのですが、色の使い方を工夫しました。それはなぜかという色覚異常の方がいらっちゃって、何通りかのタイプがあるそうなのですが、一番多いのが赤と緑が区別しにくいと、こういう方が結構いますので、例えば赤と緑をここでは使っているのですが、これを色覚異常のある方が見ると、ほぼ区別できません。ですので、後期の授業からはグラフを作成する時、カラーを使う時には、そういう異常のある方でも見やすいような配色が提案されているので、それを使って表示するようにしています。多少ですが、見分けやすくなるようです。これは色を変えるだけなので、そんなに大変な作業ではなくて、やろうと思えばすぐにできます。

次に動画の作成の話に行きたいと思います。以上でスライドができたので、それを使って動画を作っていくのですが、これは数学の特徴ですけども、普段数学の授業ではあまりスライドを使わずに黒板に手書きで説明をするということが非常に多いです。それはなぜなのかなというのを考えてみたのですが、例えばここに数式が書かれていますけども、これをパッと見てそのとおりだなと思う人は、たぶん計算が速い人だと思うのですが、普通はすぐにはわからなくて、例えば線を引いて約分をしながら消していくと、ようやくこういう風になるなというのがわかります。こういう式をただ書いただけでは伝わらないような情報が数学の式の中にあって、それを上手く伝えないといけないわけですけども、それがスライドだけだと非常に難しい、ということがありました。

それをどうしようかということなのですが、先ほどからマウスでやっているのでもあまり綺麗にできてないのですが、ペンを使って注釈を入れる。スライドには式で、式があらかじめ書いてあるのですが、そこに手書きで注釈を入れながら説明をすることで、手書きじゃないと伝えられないようなことを上手く伝えるようにしました。使った機材ですけど、私の場合はペンタブレットというのを使ってやりますけど、それで注釈を入れてやっていました。「良い点」としては、板書に比べると書きやすくないですけど、ある程度板書に近いクオリティで説明できるかなと思います。また割りと安く購入できます。

やってみて後から気づいた良い点としては、スライドが不十分であっても、その場で補えるということがあります。例えばここにミスがありますが、スライドが“シライド”になっていますが、これをその場で修正することができます。ちょっと書き忘れたなとかいうことがあったら、それも補足ができるので、

結果的にスライドをきちんと完全に作り込まなくても、多少不完全でもその場でどんどん補っていけるということで、スライド作成時間も短縮できるかなと思います。

リアルタイムの講義の場合でも同じようにやっているのですが、質問に対応しやすいということもあります。例えば数学の場合、グラフを書いたりすることが多いのですが、注釈を使ってグラフを書いたりしながら説明をしていくことができます。ペンタブレットを使ってやっているのですが、別に他のやり方も、タブレットと Apple pencil みたいなペンを使ってやっておられる方もいるようです。

収録の環境はこんな感じで、パソコンがあって、ここにペンタブレットというのがあります。ここにペンを使って書き込むと、モニタに注釈として表示されます。先ほど説明したのと同じなのですが、注釈を入れながら説明している様子を1つ、実際の授業で使ったスライドを紹介します。グリーンで書き込みをしているのが授業中に注釈を入れたところです。例えば、一番下に＝がありますが、この＝の説明をする時に少し飛躍しているなと感じたので、この辺で補足説明をしたところです。

ゴチャゴチャして見にくいような気がするのですが、このペンの色、いま表示させているものは別のソフトなので、下の文字が見えなくなっていると思うのですが、授業の時にはペンに透過性を持たせています。すると下のスライドがうっすらと透けて見えるので比較的に見やすくなるかなと思います。狭いところに書いているのでちょっと見にくいのですが、透過性を持たせると少し見やすくなるかなと思います。

あとは動画の作成ということで、ここは山田先生からも説明があるかもしれませんが、私は Zoom を使って作成をしました。Zoom を起動して、ミーティングを1人で会議を立ち上げて、スライド共有をして、共有相手がいないのですけれども、1人でそれをやって、それをレコーディングという風になると録音が始まって、会議を終了すると自動的に動画ファイルが作られます。非常に簡単に作成ができます。

便利だったのは、録音を一時停止して、ちょっとお茶でも飲んで、もう1回再開するというようなことができます。ちょっと休憩してまた再開しても1つの動画にまとめてくれるので、そういうのが便利だったかな、と思います。

それで、あとはアップロード、先ほど曾根先生のお話の中にもありましたが、ストリームというところにアップロードをしました。これも注意点というか、自分がちょっと良くなかったところなんですけども、動画は割りと前もって作っていると授業の直前にアップロードするのを忘れそうになるということがあり、その辺が注意しなきゃいけないなと思っています。あとは動画だけじゃなくてスライドですね、PDF ファイルも moodle の方にアップロードするようにしています。これはなぜかというと、動画だけだと復習しようという時にすごく大変だと思うので、復習したい場合には PDF ファイルを見れば良いと、あるいはそれを印刷したものを見るという風なことができるように、PDF ファイルを moodle にアップロードするようにしていました。ここは授業後の動画を撮影した後の話ですけども、そういうことがあります。

講義後の内容にいきます。Moodle を使う際に、前期は Weekly format というのをを使って毎週、項目を立てて作っていたのですが、その編集自体にすごく時間が掛かってしまって、結構大変だなと思いました。

後期からは Weekly format を止めてしまって、フォルダを1個作って、そこにスライドをどんどんアップロードしていく。これは、リアルタイムの授業ですので Teams 会議のリンクが載ってます。これも最初に URL を決めて毎回同じ URL で会議を開くことで、毎週スケジュールせずにやっています。セキュリティ的にはちょっと問題があるのかもしれないのですが、そのようにして今のところは問題なくできています。できるだけシンプルになるようにしています。

講義後の画面なんですけど、質問があった時に質問に対してどう対応するかということで、moodle の中に質問のフォーラムというのをを使って、そこで随時質問を受け付けるという風にしました。手書きで回答しないといけないので、結構手間は掛かるんですけども、そのようにしました。多くの人が指摘されている

ところですけども、対面授業に比べるとやはり質問が非常に少なく、そこは今後の課題になるところかな、と思います。ただ、よく考えてから質問するからなのか、割りと質問のクオリティが高くて、ちょっと考えないと答えられないような質問をする人が何名かいました。受講生に依るところかもしれませんが、質問のクオリティが高いという風な気がしました。

それで、あとはレポート課題ですが、レポート課題もやはり moodle から提出をしてもらいました。オンデマンドの方は出欠を兼ねないといけないということで、一応毎回簡単な課題を出して moodle から提出してもらいました。数学の場合、手書きで数学の式を書いたものをスマートフォンで写真を撮って、それをアップロードしてもらうという風な仕方で行っていました。ワードなどで式を作るのは大変だからです。便利だったのは、ダウンロードする時にすべての学生のレポートを一括でダウンロードできることでした。

ちょっと困ったのは、スマートフォンで写真を撮るとよくわからないファイル名が付けられますが、学生はこれをそのまま提出してきます。さらにノートをスマートフォンで撮るので、名前がそこには書かれていないから、ファイル名からもその中身を見ても誰のレポートかわからないとか、そういうところでちょっと困ることがありました。ダウンロードしたファイルを展開するとフォルダには受講生の名前が入っていますので、そちらで判断をして採点をしなければいけませんでした。ということでまとめですが、この5点、注意点をあげました。

今後の課題ですが、動画を Zoom で撮影する時に、自分のカメラ映像を一番右端のところに入れて録画するようにしていたのですが、非常に窓が小さいのであまり表情というか、身振り手振りもそんなに入らないというか、見にくいと思います。実際の授業では身振り手振りで伝えるような情報というのがかなりあるんじゃないかと思うのですが、その辺りが今のところ難しいなと思っています。ただ、この辺りも新しい技術が色々出てきていて、これ読み方がよくわからないのですが、こういうアプリ (mmhmm) が出てきていて、スライドの前面に自分を映し出したりとか、ちょっと透けて映したりとか、あるいはサイズをちょっと小さくして映す、そういうことがもう既にマックだとできるようになっています。そういう新しいものを取り入れると、身振りとか手振りを入れて、普通の授業に近いような情報の伝達というか、そういうことができるようになるのではないかと思います。これは今後の課題ということになります。

それから、これは今も現時点であまり考えられてないのですが、学生がどこをノートに取ってるのかを、まったく把握できていないというのが現状では問題点です。スライド全体を通すとやはり情報量が多いので、全部写すのは無理だなと思うのですが、やっぱり重要な部分に関しては自分でノートに写すとか、まとめるとか、そういう風なことをしてほしいところだと思います。

もう1つは、授業中に注釈を入れながら説明をするのですが、授業後の配布する PDF ファイルには注釈が入っていないので、その辺のところはノートに必要なに応じて取ってほしいと思います。その辺の指示があまりきちんとできていないと思います。口頭で、「ここはノートしておいてね」とか、伝えるようにはしているのですが、言い忘れたりとかいうこともあるし、事前に“ノートマーク”みたいなものを入れておくといいのかな、という風な気がしています。

先ほどとまったく一緒なのですが、質問が少ないというのが課題としてあります。どうしていいのかがというのがちょっとまだよくわからないところですが、オンデマンドの場合には授業時間の間は例えば moodle や Teams に教員が待機をして質問を受け付けるとか、そういう風なことをするといいのかなと思います。既に社会コースの畠山先生がされています。この点は今後の重要な課題だと思います。以上、ご清聴ありがとうございました。

(司会 梅津) 宮口先生、ありがとうございました。それでは続きまして、山田先生、ご発表をお願いします。

②実技指導とオンライン（オンデマンド）教材との関係

（山田 啓明 准教授）

音楽の山田です。よろしくお願ひいたします。今日は、宮口先生がオンライン教材の作り方ということで色々詳しくお話をさせていただいて、私も勉強になったのですけれども、私の方は「実技指導とオンライン教材との関係」という形をちょっとお話ししたいと思います。

実はですね、このFDの発表をしてくれという風にお話をいただいた時に、たぶん「どんな動画なんかを作っているんだろうか」という期待をされていたのかもしれませんが、たぶん私も含めて音楽分野の先生の中では、特に私ですけど実技の授業やレッスンそのものをオンデマンドで行っているつもりはなかったんですね。対面で実技を行う授業の人数を減らす手段として、オンデマンドを利用しております。

これを思いついたのが前期の時なんですけれども、「保育内容（表現Ⅰ）」という、受講生は少なかったのですけれども、今となつては9名ぐらいだったらどうってことなかったのかもしれませんが、やはり4月・5月ぐらいはどのぐらい感染力がすごいかわからなかったものですから、この9名をA・Bの2つのグループに分けて、前半の40分でAがD103という広い演奏室があるんですけれども、そこで対面授業をしている間、Bのグループは芸術棟6階に練習室、ピアノがある部屋、3畳半ぐらいの部屋がたくさんあるんですけれども、そこで私が作ったオンデマンドの講義だとか、実技課題、これも動画ですけれども、そういったものを行っていました。そして、また後半の40分でグループを入れ替えてやると、それで一度に集まる人数を5人以下に抑えたということですね。図で表すとこういう形になります。グループAとグループBに分けて、前半40分、それから後半40分、移動を間に10分入れて、これで人数を減らすということを考えた訳です。

これをやりながら実は私が一番危惧していたのは、後期にある「初等音楽Ⅰ」という授業ですね。例年、110人から120人ぐらいの受講生がいる訳なんですけれども、この学生たちにどうやってピアノと声楽の実技の授業を行うのか、ということです。教員数は例年、これは今年も変わらないんですけれども、ピアノが4人、それから声楽が2人、これで例年120人ぐらいの学生に実技の授業を行ってきました。

ちなみに、このスライドショーというか、パワーポイントでやってますけれども、だいたい私の作っているオンデマンドの教材、このぐらいの字の大きさでだいたい作っております。当初やった時に、やっぱり学生がパソコンを持っているとは限らない。スマートフォンしか持っていない学生もいるんじゃないかなということで、スマートフォンでも授業を見られるようにということを配慮しまして、だいたい私の動画はこのぐらいのスライドショーを作っておいて、それを動画にするということにしています。もしご興味があれば、それこそストリーム、たくさん授業をあげてますので、それをご覧になっていただければと思います。

それはさておき、話を戻したいと思ひますけれども、例年は120人をA・B、2つのクラスに分けていました。そして、その2つのクラスを更に①～④の4グループに分けます。ということで60が4に分かれますから、15人ぐらいのグループに分かれますね。ある週はAクラスの①②、③④、要するに30人ずつですけど、それがそれぞれ30人が声楽、そしてBクラスの①～④、それぞれ15人が分かれてピアノのレッスンを受けるという形でやっていました。ただ、やっぱりこの15人、あるいは30人というのはちょっと多すぎるな、というのがありました。これが表ですね、昨年度まではどういう風にしてたかということです。クラスAとクラスBに分かれまして、60人ずつ分かれて声楽が2つ、30人ずつ、そしてピアノが15人ずつ、翌週はそれが入れ替わって、というやり方を取った訳です。

今年度はどうするのかということですね。こういう風に考えました。まず昨年度は2つに分けていたのを3つに分けることにしました。120人をまずA・B・Cの3クラス、各40人に分けてみました。そして、A・Bクラスがオンデマンドで受講している時に、Cクラスで対面実技のレッスンを行う。これで1回で実技を

受ける人数を40人に減らしました。これを3回まわして1クールとすることにしました。で、オンデマンド授業は動画としてストリームにあげて公開しています。

ちょっとこれ、今クラス分けですけれども、こういう風にA・B・Cで分けて、色分けしています。ちょっとこれが見にくいので一部分だけ拡大したのを見てくださいね。こういう形で1クールですけれども、例えば10月30日はクラスAとクラスBがオンデマンドの授業をやって、クラスCが対面の授業を受けます。その翌週はクラスAが対面の授業、そしてその翌週はクラスBが対面の授業、これを3回で1クールずつ回して都合4回、実技の授業を受けられるようにしていました。

更に、実技レッスンのグループ分けをします。実技レッスンを受けるクラスは更に約5人ずつ、120人としたら5人ずつの①～⑧のグループに分かれます。これもまた先ほど「保育内容」でお見せしましたように、前半と後半で分かれます。授業の前半の40分で①②と③④、要するに10人ずつのグループがそれぞれ2人の教員から声楽のレッスンを受けます。D101と、それからD103という広い教室でやっていただきました。そして、⑤～⑧のグループは4人の教員からピアノのレッスンを受けるということで、これを授業の前半・後半で分けます。声楽とピアノのレッスンを授業の前半と後半で入れ替えることにしました。これを図にするとこういう風になりますね。ですから9時から9時40分、それから9時50分から10時30分まで、40分ずつに授業を分けた訳ですね。例えば、①②③④は前半に声楽のレッスンを受けて、そして後半にまた分かれてピアノのレッスンを受ける。これによって一度に集まる人数は声楽なら10人、そしてピアノなら5人、こういう風に減らすことに一応成功して、今はこういう風な形で授業を進めています。

ちなみに、どういう風に変ったかという、1回ごと個別に1人ひとりにレッスンをするということになりますので、他の学生はどっちかというとボーッと待っていきやいけない。でもボーッと待ちながら他の学生のアドバイスを聞くこともできるので、それはそれで非常に有意義なんですけれども、それが少なくなってしまったかなということで、1人あたり1回の時間は、今の方が増えたかな。昨年までは確か1回につき6分ぐらいしか受けられなかったのが、現在は8分ぐらい受けられるようになっています。少し長くなりましたけれども、しかし去年は15回のうち5回ずつレッスンを受けることができて、最後に実技試験があるので4回なのですけれども、それが1回減ってしまったということにはなっています。

なぜ対面にこだわるのか、これはもう実技関係の先生は当然ですけど、まずはレッスン、これは音楽が特にそうかな。レッスンはゼミのようなものだと思います。受講者は与えられた課題を2～3週間掛けて準備して、2週間ごとに見てもらった訳ですけども、レッスンで発表して指導を受ける訳ですね。どういうことかという、先生の方は授業の準備をしなくていい訳ですね。準備しなきゃいけないのは学生の方ですので、それをレッスンで色々やらないといけない。

これが本当に全部オンデマンドになってしまったらですね、これはちょっと例の共同教職課程といいますが、連携教職課程のことを念頭に入れながらお話ししますが、今まで学生が用意しなきゃいけない分の授業を教員の方が用意しなきゃいけないということで、全然やるのが逆になってしまう。それはたぶん実技の先生は大変なことになるだろうな、と思っています。そういったレッスンでは教師が受講者それぞれの問題点を指摘し、褒めたりあるいは叱咤しながら練習の仕方をアドバイスして、また受講者の進度に合わせて次回のレッスンでの課題を与えるということですね。オンラインはともかくとして、オンデマンドではこれは絶対、無理な訳です。

また、双方向オンラインレッスンの可能性、これも実は4月・5月に色々実験をしながら音楽でも試してみた訳ですけども、巷ではSkypeだとかZoomを使ったレッスンが行われています。しかし、音質が悪いのと、画面をずっと見続けなきゃいけないということで、長時間続けるのが非常に苦痛です。ちなみに私の家内も声楽科で、こういう時期ですのでZoomを使ってレッスンをしていますけれども、やっぱり画面をずっと見続けなければいけない。それからもう1つ言うと、歌だとかは伴奏が必要になってくる訳です

ね。伴奏を流しながら、なおかつ Zoom でやるということで、スマートフォンとパソコンのように 2 つデバイスを用意しないと、そういうことができないというようなこともあるという風には聞いております。

それはさておき、やっぱり Zoom、非常に音質が悪いです。特にピアノですね。Zoom だとか Skype というのは、人の声でやりとりをするために特化してできてますので、すごい高い音だとか、すごい低い音だったりとか、それから音量ですね。バーンとピアノなんかは大きな音量で鳴らしたりしなければいけない訳ですけども、そういった音だと、やはり音が割れてしまったりだとか、割れてしまうのを避けるために音を全部カットしてしまったりして、当然聞こえるはずの音が Zoom だと聴けなくなってしまうということが起きております。

そういった結果、やっぱり Skype や Zoom じゃ無理だなということで、実は学生に 4 月の段階で YouTube のチャンネルを自分で作りなさいと、そういう風にあまりこういうのは大きな声で言えないんですけども、学生に YouTube のチャンネルを作らせて、そこに自分の動画をアップロードして限定公開する形にきなさいと。そのリンクを教員に送って、そしてそのリンクを教員が見て、そこで実際にアドバイスとかはお互いにその動画を見ながら Skype などで問題点をやりとりする。私はこういう授業はしてませんが、声楽の頃安先生だとか、ピアノの森先生などはこういった方法でレッスンをしていたと聞いてますけれども、但しやっぱりこういったやり方は限界があるだろうなと思っております。

とはいうものの、例えば簡単な楽器の演奏等の紹介動画ぐらいでしたら作れるだろうな、と思いましたし、私自身、「保育内容」だとか「初等音楽 I」なんかで、そういったものを作ってみました。それをストリームにアップしたりしています。YouTube には、プロの打楽器奏者によるレッスン動画も上がってますけれども、やはり“帯に短しタスキに長し”と言いますか、そういったちょうど良いものはありません。

2 台のカメラで撮影して、カメラの切り換えで音が変わらないように録音機で音を別録音して、それを撮影後に Final Cut Pro というソフトがあるんですけど、それで編集するというような形で作った動画をストリームにアップしていますので、それをちょっとご覧いただきたいと思います。それでは再生したいと思います。私のパソコンでは滑らかに再生されているんですけど、こちらのプロジェクターではちょっとカクカクですね。今ちょっと角度が変わりましたが、2 つのカメラを使って撮影をしています。はい、これぐらいにしたいと思います。このような動画をアップした訳です。これをちょっとどういう風に撮ったか、というのを図示しますね。こういった形で 2 台のカメラを使っております。左下に山田が立っていて、正面からカメラ、そして右斜めちょっと上の方からもう 1 台のカメラで録りました。

あともう 1 つ、ちょっと付け加えると、この図ですけども、Adobe の Illustrator で図を描いて、それをパワーポイントに移したんですけども、たかだかカメラやモニタの線が滑らかに書けなくて、ベジェ曲線と言うんでしょうけれども、これをカメラからモニタにつなげる線を描くだけで何時間も掛かってしまうし、あとカメラの形、レンズの台形ですね。あれも作り方を作っては忘れてしまうので、そんなくだらないところに無茶苦茶時間を掛けています。他にも音楽関係ですから、楽譜だとかピアノの鍵盤なんかをたくさん作って、教材を作ってます。もし興味があれば、ストリームに上げている授業をご覧ください。こういう形で、音は別録りにしています。どういうことかという、カメラ 2 台で画面の切り換えをしますと、どうしても音も切り替わってしまいますので、音だけ別にして最初に 2 台のカメラを編集した後に、再び今度は音と組み合わせる、そういった形で作っています。

それから、あとはこのモニタテレビを後ろに置いているのは、やっぱり自分がどういう風に映っているのかといったことがカメラだけではわかりませんので、後ろにモニタテレビを置いて、自分が実際にどういう風に見えるのか、というのをチェックしながらやらなければいけないということですね。ただ、このモニタテレビを付けっ放しにしてやっていると、どうしても映っている自分の顔に向かって喋りかけてしまうので、カメラ目線にちゃんとなってくれないという問題もあることを申し添えておきます。

ということで、こうやってたくさん作ったんですけども、収録は大変です。どういう風にしてああいったビデオを作るかという、動画の構想が決まったら教室にカメラとモニタ、それから楽器を設置して、照明を調節して、撮影後、ファイルをそこに取り込んで編集、アップロード、終わったら片付けをしなければいけません。教室を占有してしまうため、基本週末あるいはそれこそ大学に人が来ていない4月・5月の間に孤独に作業をしてました。これも本当にそこまで苦労してもやっぱり手作りレベルの映像クオリティにしかありません。やっているとだんだん虚しくなっていました。

いずれにしても私自身は、本学に来た頃から映像コンテンツというのはずっと作り続けてきました。ですからYouTubeの登場以前にも「歌あそび」の動画サイトなんかを本学のホームページ上に作っていたし、映像制作のノウハウというのは持っているつもりです。オンデマンド教材づくりにおいては各自の持っているノウハウによって、どんなコンテンツを作ろうか、という発想が結局制限されてしまうんですよね。そこがやっぱり一番大きいのではないかと考えています。

あとは、自分の持っているパソコンソフトですね。あんなことができたらいいな、けどどのソフトを使えばいいのかわからなかったとか、お金が掛かってしまったり、というところも問題になってきます。例えば自分の場合ですけども、本当は授業をわかりやすくするために挿絵が欲しいなと思っているんですけど、それを自分で描くというのはちょっとできない訳ですね。あるいは今ソルフェージュ、楽譜を読んで歌を歌いましょうというような、そういった課題を作りたいんですけども、スマホアプリなんか市販されていて、そういうのは歌ったらそれで正解とか、何ヶ所間違っただけみたいなことが見えるようになっている。そういうものを学生に紹介して使わせてもいいんですけど、いかんせん曲が無茶苦茶で、こんなものを使わせたくない。自分がこんなアプリを作れたらいいのにな、これを授業でできたらいいいのになと思ったりするんですけど、なかなかそういったノウハウがない訳ですね。そういったものがたぶん自分自身が思いつけてもいないような、様々な手段があるんだろうと思います。

今後、それこそ連携教職課程みたいなのもあって、そしてレベルの高いオンライン、あるいはオンデマンドコンテンツというのを作らなければいけなくなってくると思うんですけども、そうなったら様々な専門、あるいは得意分野を持つ教員・職員が知恵や技術を出し合っていける関係、あるいは専用のスタジオだとか、あとはカメラなんかを操作するスタッフみたいなものができるといいなと思っています。但し、こういったことが各自の負担が過大にならないというのが条件です。

ということで以上ですが、最後にもう1個、YouTubeに上げたもの、こういうものを作っています。これは、ピアノの鍵盤のどこがドでどこがソかわからない学生、結構いるんですね。私が手を動かして、ドとかソとか叩いてるんですけども、こういったものを今年、実技のレッスンが始まる前にオンデマンドで作りました。実際に実技に入った時に、これをちゃんとやってきた学生がいたかという、もちろん弾ける学生は弾けたんですけど、「やっておけ」と、私が動画まで作って置いておいたものを全然できていない学生も相当数おりました。「お前、ちゃんとオンデマンド見たのか？」と言うと、「見ましたけれど…」と言ってたんですけども。やはりそういうことを考えると、「そんなじゃダメだよ、もう1回次までにやってこい」というような、叱咤激励というのはやっぱり大事な、と思った次第です。ということで、以上で発表を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

(司会 梅津) 山田先生、ご発表ありがとうございました。宮口先生、山田先生にはここまでのところでご実践についてご紹介いただきました。

最後に幾田先生にご発表いただきますのは、今度は学生の立場から、受けた者の立場からオンライン授業はどのような特色があり、課題があったのかということをご紹介いただきたいと思います。幾田先生、よろしく願いいたします。

(3) 「学生のオンライン授業の受け止めと改善の方向性」

(幾田 伸司 教授)

幾田でございます。今、梅津先生からご紹介がありましたアンケートに関しまして、その結果についてのご報告をさせていただきます。よろしくお願いいたします。

まず、タイトルですが「オンライン授業に関するアンケート」ということで、学生に対して前期の授業の終了後から8月25日までの期間で、オンライン上で回答するということと調査を行っております。

回答者数は281名でした。後で詳しい内容はご説明しますが、最初に「オンライン授業で使った機種について」、それから「オンライン授業の通信環境について」、「操作・接続方法の問合せについて」、ここからが本格的な内容になり、「オンデマンド型授業 (moodle 等) について」と、「同時双方向型授業 (Teams・Zoom) について」、これらの授業について3つずつ質問項目があります。それから全体として「オンライン授業の改善点について」、最後に自由記述で「オンライン授業全般について」ということで、すべてで15の質問項目を立てて聞いています。

具体的な内容を見ていきます。ポータルサイトに具体的内容がすべてアップされておりますので、すべてご覧いただきたいという先生はポータルサイトをご覧ください。まず所属です。先ほどの281名は次のようになっております。1年生が比較的多く回答してくれているかなというところですが、それから、院生の方が在籍数は多いのですが、6割ぐらいが学部生の回答になっております。学生の具体的な記述に関して、誰がどのような回答をしたかわからないのですが、このような学生たちが回答した内容だということをご承知おきください。

ここから具体的な内容になります。まず、受講に使用した機種についてです。先ほどからの先生方のご発表の中に出てきたことと重なることも多々ありますが、具体的に答えられた内容ということで、このまま説明します。使った機種は半分がパソコンですが、スマートフォンが182名います。複数回答です。パソコンを使ったりスマートフォンを使ったりする学生もいますが、182名の学生はスマートフォンを使ってオンライン授業を受講しました。スマートフォンですとどうしても画面が小さくて見にくかったりとか、あるいはレポートを出す時にスマートフォンで作成できるコンテンツでなければ提出できなかったりということが出てきます。ワードなどの文字のレポートなら問題ありませんが、グラフなどになるとちょっと難しかったという意見もありました。先ほど山田先生からのご報告に文字の大きさということもありましたが、半数近い学生がスマートフォンで授業を受けているという状況は、こちら側が念頭に置いておかなければいけないことかな、と思います。一方で、大学の端末は20名しか使っていませんでした。その辺りは具体的な環境の問題になってまいります。実質このような形で学生たちはオンライン授業を受けていたということです。

次のデータ容量ですけれども、一番多いのが10ギガまでのデータ容量でした。先ほど曾根先生にお伺いしたら、だいたいこれでオンラインをまかなえるだろうということです。50ギガまでいくと更に74名プラスされますので、回答した学生の7割ぐらいはおよそ問題なくオンラインを受けられるかなということになっています。一方で、1ギガより少ない学生も8人いますが、この学生たちはスマートフォンでのオンラインの受講は厳しいかな、というところです。

次は、機器を新たに購入したかどうかということです。192名、全体の7割近くは持っている機器を使用していたのですが、新たに購入した学生が90名弱います。このような学生はオンラインを受けるに際して何らかの手当をしていかなければ、自力で新しく何かを購入しなければオンラインが受けられない環境にあったということです。

先ほど寮のお話も曾根先生からありましたけれども、次はインターネット環境についてです。193名が光回線を使っていますので、ほぼ問題ないのですが、VDSLが13名、スマートフォンしか使っていない学

生が28名いました。回線に関しても、すべての学生がスムーズにオンラインを受けられる状況ではなかったということです。1つ前にありましたように、例えば学校でないと受けられない学生もいたということも含めて、全員がスムーズにオンラインを受けられる状況ではないということも考えておく必要があります。

ここからが具体的な内容に入ります。まず、「機器の操作や接続方法など、分からないことがあったときはどうしましたか」という質問です。一番多いのは「友人に尋ねた」が112名でした。その下方に「分からないことがなかったので問い合わせなかった」という人が77名いますので、だいたい3割ぐらいの学生は分からないことがなかったということになります。こういう友人に尋ねたという人たちが4割ぐらいいて、だいたいの学生たちは自分たちの間でなんとか解決していったということになります。ただ一方で、分からないことがあった時に教務課であったりとか教員であったりとか、問い合わせた学生たちもいます。学生たちは、分からないことがあったら、なんとか自分たちで対応していたという状況だったようです。

では、具体的にどんなところで困ったのか、ということ的自由記述で書いてもらっています。1つは、moodleやTeamsの使い方がわからなかったという意見です。これは私たち自身もやっぱり最初は大変戸惑いましたし、学生たちもよくわからなかったようです。中でも多かったのが、普通使っている言葉とは違うという意見です。特にmoodleでは、普段使っている言葉ではない言葉がいきなり出てきて、それで対応していかなきゃいけないので、その辺りで困ったということがありました。それから、PCの機種とかサーチャージのの違いからトラブルが起きたというものもありました。具体的にはマックのパソコンだったら上手くいかなかったとか、ヤフーだと上手くいかなかったとか、そういう機種やプロバイダの関係でトラブルがあったということが自由記述の中にはありました。

次に、授業で使用する会議システムについての意見で、具体的にはTeamsかZoomかということです。先生方の中にはZoomで授業をされた先生もいらっしゃいましたが、学生の側はある授業がTeamsで、ある授業はZoomだと、Teamsで受けようとしたらその授業はZoomだったとか、結構、迷ったり困ったりしたということがありました。「探している間に授業が始まっちゃい、どうすればいいのかわからなかった」というような記述もありました。初回が終わればこの授業はZoomだということで迷わなくなるのですが、特に最初の授業の辺りで困ったという意見がありました。また、「授業に関する通知が来たり来なかったりして迷った」という意見もありました。授業連絡の設定については、私たちもほぼ最初に設定したもので使っていたので、ある授業に関しては通知が来るけど、ある授業に関しては来ないといった、授業によって通知が来たり来なかったりということで、大変困ったというものがありました。

それから、1年生や留学生からの意見が多かったのですが、私たちは普通にLive Campusは使えるものだと思って連絡に使ったりしていたのですが、Live Campusの使い方自体がわからなかったというものがありました。同じように、学内LANの接続の仕方がわからないといった、大学内の通信環境にアクセスする方法自体、つまりオンラインで授業を受ける以前のところで困っている学生もおりました。

「moodleを用いた授業で良かったことは何ですか」ということですが、一番多かったのは上にあるように、自分のペースで学習できる。つまり学校に来なくていいし、自分の空き時間とか、自分が受けたい時間に受けることができるということでした。それから自宅等で学習できるということがありました。他にもいくつかの意見はあるのですが、だいたいこの辺りにメリットが固まっています。

一方、デメリットです。一番多かったのは課題についてですが、これは後ほど触れます。その次に多かったのが、先生に質問することができないということです。これも先生方の印象のとおりです。先ほど宮口先生のご発表の中にもあったように、質問がしにくいということが学生の意見にも出てきています。

具体的な記述を見ていきます。オンデマンドの授業でわかりにくかったことでまず多かったのは、授業

内容が分かりにくかったということでした。1つは資料の情報量が多い、つまり渡される資料が多すぎて、理解が追い付かないということです。質問がしにくいということもあり、わからないところはわからないまま授業を受けている、わからないものをそのままにしているという学生たちの声がありました。

それから、わからないことがあった時、対面や双方向の授業であれば、友達に「これ、どういうこと？」と聞くのだけれど、1人で受けているので相談もできず、なかなか考えが深まっていけないという意見もありました。この辺りがオンデマンド型の授業の短所として挙げられています。また、フィードバックされた先生もいらっしやると思いますが、学生としては課題に対するフィードバックが欲しいという声もありました。このことと重なりますが、学生から見ると自分の理解が合っているのかに自信が持てないので、提出した課題がそれでいいのかどうかということのフィードバックがないと自信がなかったということです。課題の提出の方法が授業によってまちまちなので、どこにどのようにして課題を出せばよいか分かりにくかったと意見もありました。教員サイドとしては、このように出してくださいねという指示を出しているのだからわかるだろうと思っているんですけども、学生としては多くの授業で課題を出さないとならなくて混乱してしまうので、統一フォーマットにしてほしいという意見がありました。

課題について困った点で一番多かったのが「課題が多い」ということでした。ですが、よく読んでみると、課題が多いということは3つに分けられます。1つは、授業全体で課題の数が多いということです。一つ一つの授業ではそれほど多く課題を出してなくても、授業全体では課題の数がどうしても増えるということですね。「先生方で話し合って全体の課題の数を調整してほしい」というなかなか難しい意見もありました。これとは別に、1時間に示された情報、先ほど申し上げた1時間の授業内容に対して課されている課題の量が多い、あるいは難しいという声もありました。また、特定の時期つまり前期終了間際にたくさん課題をこなさなければならなくなっていて多いと感じている学生もいました。これは学生たちがきちんと分散させて計画的に課題をこなしていればよい話なのですが、どうしても締め切り間際にかためてしまうので、課題自体が多すぎると感じているということです。課題が多いというのは別の話ですが、提出が完了したかどうか分からないで不安だった、出した課題を受け取ってもらえたかを学生の側では確認できず、本当に届いているかどうか不安だったという意見もありました。課題の提出の方法については、課題の提出期限を個々に記載はしていますが、一つの授業の中でも提出期限や提出方法がいろいろあって分かりにくかったので、できればいつ・どこに出せばいいのかという一覧のようなものがあつたら有り難いということでした。

次に、Teams です。Teams に関しては、学生は比較的好印象のようです。よかった点では、自宅で学習できるということがやっぱり一番多く 243 名です。コンピューターのスキルが高まるという意見もありました。逆に、課題だと感じているところは2つです。1つは、質問がしにくいということです。これは先ほどのオンデマンドとも重なりますが、やはり Teams でも対面授業に比べると質問がしにくいということが一番多い意見でした。

また、Teams の場合には、先ほどのオンデマンドに比べてネット環境の課題というものがものすごく多く出ています。具体的には、接続が途中で切れるというアクシデントへの不満です。途中で切れてしまっても話は続いているので、繋げ直した時にどんな話題になっているのかがわからなくて困る、更にそれを誰かに聞き直すこともできないので、一度切れてしまつたら授業について行きにくくなるという声がありました。Teams 自体は比較的好印象なのですが、ネット環境をきちんと整備しないと学生たちにとっては受けにくいということがあります。それから、これも具体的な環境の問題ですけど、タイムラグなどがあつて複数の人が同時に発言する場面が生じることがあり、内容が聞き取りにくいということです。上から4つ目の意見は大きな課題だと思います。聴覚に障害がある方からの実際の声で、「Teams だと聞き取りにくい、もしくは聞き取れないという場面があつた」ということです。聞き取れる時もある

が、音声が聞き取れなくて切れてしまうと、その後についていけなくなって困ったということでした。聴覚障害がある方への対応は、オンライン授業をやっていく上で必ず付いてくる課題になりますので、これから私たちも考えていかなければいけない課題だと思います。

オンライン授業全般に関しての意見ですが、先ほどの山田先生のご発表にあった実技科目をどう行うかということが、真っ先に上がってくる課題でした。実技をオンラインでどうやっていくのかということを考えてほしいということでした。次に、時間割の整備が必要だという意見もありました。具体的に言うと、オンラインと対面が混在していると、対面授業の次の時間がオンライン授業である場合、コンピュータを持っていないが、家に帰ることができないのでスマートフォンで受けるしかない、でもスマートフォンだと見にくくて授業が受けにくい、なのでオンラインと対面が1時間ごとに変わってしまわないような時間割にしてほしいということです。

それから、上から5つ目あたりに「授業を受けることができる部屋を確保してほしい」という意見があります。オンライン授業を受ける部屋は現段階でも準備しているのですが、Teamsの授業だと声を出す場面が多くなり、ある程度大きい声を出しても大丈夫な部屋が欲しいという声がありました。

オンライン授業の良かった点に関しては、全体の1割ぐらいの学生がコメントしていました。1つはこのような状況下なので安心して授業を受けられるということです。他には、自分のペースで学習できるということ、それから資料の共有がしやすいという声もありました。通信環境、授業の内容や方法が整備されているという但し書きつきでメリットが多いという声がありました。

ですが、全体としては結構ネガティブな意見の方が多かったです。自由記述はクレームの方が多く出やすい傾向がありますので、こういうところが困ったという意見が多かったということがアンケート全体の印象としてはあります。

最後に、オンライン授業に対する具体的な提言をいくつかご紹介して終わろうと思います。1つは、オンデマンド型授業と双方向型授業を併用したり、使い分けたりすることを考えてほしいというものです。どちらかだけではなくて、場合に応じてオンデマンドと双方向型を使い分ければ良いのではないかという意見でした。また、これは現時点でも実施されているのですが、スライド情報と音声情報とを組み合わせると比較的わかりやすいので、そのような授業コンテンツを作ってほしいということがありました。

それから、授業の進め方などについて教員間で情報を共有してほしいという声もありました。今年度は、とりあえず突貫工事的に授業を始めなければならなかったのも、各先生がそれぞれの進め方で授業を作っていました。これをもとに、今日の場のように、ある程度ノウハウを共有しながら授業を考えていけば、今よりよい授業になっていくという意見です。

私の方で自由記述を抜粋した部分もごさいますが、ご報告は以上です。ありがとうございました。

(4)「質疑応答」

(司会 梅津) 幾田先生、どうもありがとうございました。ご着席ください。ご発表の先生方、非常に時間をよく守っていただきまして、スムーズに内容の濃い発表をいただいたかと思います。

20分弱とはなりますけれども、フロアに集っておられる先生方、ご質問とかご意見等を受け付けたいと思います。Teamsをご覧の先生方におかれましては申し訳ございません、質問を受けるということができませんけれども、ご容赦ください。

ご質問・ご意見をいただける場合には、ご自身のお名前と、それからどの登壇の先生にご質問があるのかということを示していただきたいと思います。

では、よろしくお願ひします。いかがでしょうか。内藤先生、お願ひします。

(内藤 隆 教授)

質問じゃないんですけども、よろしいでしょうか。

(司会 梅津) はい、どうぞ。

(内藤) 山田先生、今日は発表ありがとうございました。ご協力できることはありますので、いつできるかどうかというのはアップアップしてることがありますが、できるだけ対応したいと思います。

(山田) ありがとうございます。先生だけでなく、美術の学生さんなんか結構、絵心のある学生さんたちがたくさんいて、イラストなんか上手に描かれるので、ああいったイラストを頼んで入れたら素敵になるだろうなとか思いながら作っているところです。ありがとうございます。

(司会 梅津) はい、ありがとうございます。その他、先生方、ございますでしょうか？もちろん職員の方皆さんもお願いします。

司会からの質問で大変恐縮なんですけれども、少し私の方から質問をさせていただきたいと思います。幾田先生にご発表いただきました学生の声、そして学生の課題ですね、これを踏まえた上で、ご実践を報告いただきました宮口先生と山田先生に可能な範囲でお答えいただきたいと思います。

オンライン型の授業のカテゴリとして、私などは幾田先生のスライドの中にありましたけども、同期双方向がワンセットで、オンデマンドというのがワンセットあって、この同期双方向とオンデマンドというのは対を作って考えがちなんですけども、しかし考えてみますと同期・非同期と双方向・一方向というのは、それぞれの組み合わせで類型を立てることもできるんじゃないか、という風に捉えました。

課題の中にあっただけですけど、オンデマンドだと自由な時間に見ることができるというメリットがある反面、やっぱり学生たちは双方向性に不満や課題を感じているということも、今幾田先生のご発表を伺っていてわかりました。

そこで、可能な範囲で実践の両先生にお聞きしたいのですが、オンデマンド型の授業で双方向性を確保しようとする時に、何か工夫できる点というのはございますでしょうか。これが私から質問させていただきたい点です。繰り返しになりますが、可能な範囲でお答えできれば、お願いいたします。宮口先生、いかがでしょうか。

(宮口) そうですね。まだ自分自身ができていないんですけど、オンデマンド授業であっても、その授業時間というのが確保されているので、その時間帯に例えば Teams を立ち上げておいて、そこに教員が待機している。その上で受講生がオンデマンド教材をその時間内に見て、質問が出たらその Teams に入って質問をする、というようなことはできるかなとは思っています。

(司会 梅津) ありがとうございます。

(山田) ちょっと難しい、私は思いつかなかった。ただ、私が発表した時間を区切って一部分はオンデマンドで一部分は対面で、みたいなこともその中に含まれるのではないかなと思っています。

結局のところ、やっぱりコロナの感染防止というのが一番、そこがこういうオンライン授業の目的ですので、一度に集まる人数を減らすというようなことをして、そこで双方向のものをやっていくことは可能ではないかなと思っています。

(司会 梅津) ありがとうございます。フロアの先生方におかれましてもご実践の経験上、困った点もありましょうし、ご工夫なさったところもあろうかと思えます。お互いに実践の共有をするというのも今日の重要な観点の1つですので、関連してご質問でもご紹介でもいいですし、また別の質問・意見でもいいですので、お願いします。余郷先生。

(余郷 裕次 教授)

国語科教育実践分野の余郷です。ご登壇の先生方、ありがとうございました。色々本当に改めて勉強になりました。自分も至らなかったと思うんですけども、授業のことについても実際あるんですけど、例えばこの間、セクシャルマイノリティの研修がありました。

非常に勇気のある登壇者の方もいて、非常に感銘深い研修会で、やはりその時のことは有りありと今でも思うし、心に残るものがいっぱいありました。ところが、デジタルコンテンツによってパソコン上で研修を受けるというものもあります。その時に私は何を思ったかというと、いかに効率的に短期間でこの研修を終わらせるか、ということを一瞬懸命考えている自分がいたんです。

つまり、何というか私のような怠惰な人間は、やっぱりデジタル的なものはいかに効率よく短時間で済ませるかという、それは悪いことではないかもしれませんが、言うてはいけないかもしれませんが、最後のテストだけ合格すればいいと、そういう発想にも私みたいないい加減な人間は陥る訳ですね。

とすればですね、学生はどうだろうかと思ったんです。対面授業で教室に、そこに居ることによって、仲間が居ることによって学習が成り立っている部分があるんじゃないか。変な話ですけど、同じ空気を呼吸するというか、そこに居ることによって学習が成り立っている部分があるのではないか、ということを変更して今回のことにつくづく思ったんです。

本当にオンライン授業ということで成果が上がる実感があるのかな？ということ、私は自分自身がオンラインでは成果がやっぱり対面のように上げられないという実感があるので、それぞれの先生方にご忌憚のないところを質問したいと思います。お願いします。

(司会 梅津) はい。余郷先生、4名の先生方にお答えいただければいいですね。それでは、曾根先生からお考えをお聞かせください。

(曾根) はい、そうですね、難しいとは思いますが、映画があつてテレビもあつて演劇もあるみたいな、何かそれぞれメディアが少し違って、属性も違っているので、何かオルタナティブだと考えるとちょっと劣っていると出てくるんですけど、それぞれ上手く向いていることを見つけてやっていけばいいのかなと思ったりもしています。

ちょっとあまり答えになってないかもしれないですけど、比較するんじゃなくて、良いところを見つけて上手く使っていけばいいかな、と思っています。

(司会 梅津) 幾田先生、いかがでしょうか。

(幾田) アクティブ・ラーニングのように、やっぱり対面型の実際にそこに集ってする学習が必ず必要だと思います。一方で、効率よく知識や内容を伝える講義型の授業においては、オンラインが強い部分もあるかなという気はしています。なので、対面型の実際にそこに集って行う授業と、オンラインで講義中心の授業と、それぞれの良いところを使い分けるということが必要なのかなと思います。

現段階において、オンラインしかなかったのが前期ですので、この形式だけでやることには無理があると思います。

(司会 梅津) ありがとうございます。宮口先生、お願いします。

(宮口) そうですね、繰り返しになるかもしれないのですが、例えばオンデマンド教材の場合は何度も聞けるというメリットもあるので、やる気のある人にとってはむしろよかったりすることもあると思います。例えば、早送りしてどんどんレポート課題を出すだけで済みますよ、という人もたぶん中にはいると思うのですが、やはりレポート課題を工夫して、きちんと聞かないとできないようにするという事はやっぱり必要なという気がします。

あと、コロナでちょっとでも体調不良があると休む必要があるので、そういう人たちの対応として、仮に対面になるとしても、オンデマンドの教材は必要になってくると思います。対面の方が確かによいとは思いますが、そういうものも作っていかないといけないのかな、という風には思っています。

(司会 梅津) ありがとうございます。山田先生、いかがでしょうか？

(山田) もちろん、余郷先生のおっしゃっていることは当然だと思いますが、また別の考え方をするとやっぱりオンデマンドだとかオンラインが対面の授業に代えられるとはとても思いません。

但し、これはもうまったく別のものだとも思うんですね。やっぱりオンデマンドというのはこれはまた1つの新しい手段であって、今回特に、先ほどやった「初等音楽Ⅰ」で、オンデマンドでまったく今まで教えていなかったものをゼロから作るみたいになったんですけれども、ちょっと音楽理論入門みたいなことをやったんです。たぶん対面だったら、そんな授業をやったら学生の目が死んでいって、こっちも授業をやることに耐えられなくなると思うんですね。付いてこれる人は付いて来いと、でもやっぱり付いてこれなかったら置いていく、と言うとちょっと酷いですがけれども、但しやはり大学というのはできることだけ教えるんじゃなくて、難しいことというのを教えていかなければいけない。

そういう時に、やはり自分のペースで1回戻ってみることができるだとか、そういったことができるということ、それから、やはりどうしても講義になると、その時の勢いでエイヤッ！といって、学生がわかるかわからないかはとりあえず置いておいて自分の勢いだけで授業をやっちゃう、ということができるとは思いますが、オンデマンドになると、やはりもう1回学生に振り返られて、「あそこはどうだったんですか？」という風に、自分自身もそういったことできちんと緻密に教材を作らなければいけないということで、今回この機会にそういった音楽理論入門みたいな教材を作れたのは良かったかなと、これはやはり対面ではとてもじゃないけどできない授業だったかな、と思っています。

(司会 梅津) ありがとうございます。余郷先生。

(余郷) すいません、時間を取るみたいなんですけども、学習意欲が極めて高い学生にはオンラインが合っているというか、成果が上がると思います。しかし、実態から見ているとやはり課題をなんとかこなせばいいという、友達から課題を・・・とか、あるかどうかは確かめていませんけど、色んな課題をこなすということにオンラインの場合は流れる学生が多いんじゃないか、ということをお心配しています。

ですから、意欲の高い学生にとってはメリットがあるけど、本当に成果全体として実は対面授業から失っているものが多すぎるんじゃないか、という心配をしています。オンラインで授業ができると、私は確信を持ってないですよ。それはたぶん赤ちゃんがオンラインでは言語を獲得できないんですよ。極論を言うみたいですが。つまり、そこには対面による呼吸のシンクロがないと、コミュニケーションと言いますか、教育ということが実は情報だけじゃなくて、呼吸のシンクロによって社会機能的には意味とかなんなものが対面で、赤ちゃんなんかは生身の対面とか接触によって教育されるところが、本当に学びの基本にある。

オンライン授業というのは、もちろん大人が相手だということが前提にあるかもしれませんが、小学校の教員養成や幼稚園ですね。我々はそれを前提にしてやっている訳ですから、オンラインの授業が何を失うかということを実に見つめないで、それは対面の授業が何だったかということの更に研究になると思うんです。まったく赤ちゃんからオンラインで言語を獲得できるという証拠がない限り、オンラインの推進にはですね、私としては賛成できないという立場です。すいません、ちょっと時間を取りました。

(司会 梅津) はい、ありがとうございました。本日のシンポジウムとFDの趣旨を改めて確認したいんですけども、余郷先生のご主張は日頃から聞かせていただいているところでもあり、非常によく理解できるところです。

ですけども、そもそもコロナ禍の中でどうやって学生に教育内容を提供するのかという、こういう事態の中でオンライン授業というのが構想されて、今日、登壇の先生方はその例を課題を含めてご発表いただきました。だから、取りまとめるつもりはないんですけども、曾根先生でしたかね、おっしゃったようにオルタナティブではなくてハイブリッドですよ、キーワードが。課題を見据えつつ、やはりハイブリッドをこれから追求していかないとならない。そういう前提のFDですので、その辺をご理解いただきまして、余郷先生のご意見も承りながら、皆で考えていければな、という風に思います。

もう少しだけ時間がありますけど、もう一方ぐらい、関連してでもいいですし、その他のことでも結構です。ご意見とか、ご質問等ございますでしょうか。はい、どうぞ。

(佐古 秀一 理事)

本当に今日は登壇の先生方、ありがとうございました。今回オンライン授業の実施については成果とともにさまざまな課題があると思うんですけども、余郷先生の話聞いておまして、もし可能であれば簡単にコメントをいただきたいと思います。

それは何かというと、例えばオンラインではなかなか学生が話をしにくい、あるいは質問がしにくいという話がありましたけど、そのことの一部はどうしても人間関係にあるのではないかな。あるいは、先生との関係ができていない場面で、さあ何か言いなさいということの困難さにあるように思います。特に4月からスタートしましたので、クラスの関係がわからない状況でオンラインの授業になってしまった。これはやむを得ないことでしたが、1つの授業の中で対面というか、関係を作る授業があって、やがてオンラインのセッションがあって、それからその後に対面があるという授業構成を今後は考慮すべきではないか。一つの授業の中でのオンラインと対面の効果的な組み合わせということですよ。

そのことによって、オンラインの良さをさらに活かせるのではないかなという気持ちがしましたので、最初に対面セッションを組み込むということで、オンラインに効果的に繋がるかなというようなことを感じました。その辺、何かご意見があれば、お聞かせください。

(司会 梅津) はい、ありがとうございます。私なりに整理しますと、対面からオンライン、オンラインから対面にスムーズに学生たちが繋がって学びを深めていけるような何か手立てがないのか、というご趣旨だと理解しました。

短い時間しかございませんけれども、まとめの意味も含めまして1分ぐらいずつで、曾根先生からご発言いただければと思います。可能な範囲で結構です。

(曾根) はい、ちょっと何て答えていいのか、という感じなんですけれども、確かに、最初は特に1年生の授業をやっている時には人間関係とかできていなくてすごい大変でした。

私の授業でたまたまスマートフォンを皆さん持っているので、ある時間、授業中に外に行って周りの景色を撮ってきて、それをワンドライブに挙げてみましょうという活動をしたんですけど、そんなことをするとみんな「久々に外に出ました」とか、「同じ空を見てるんだなあと感じました」とか、感想があったりして、そんな活動ひとつだけでも人間関係ができるというか、そういう経験がありました。

まだまだ我々もノウハウを全然わかってないままやっているんですけど、工夫をすればもっと良くできる部分はかなりあるかなと思います。自分の経験から、ちょっと答えになってないかもしれませんが。

(司会 梅津) ありがとうございます。幾田先生、お願いします。

(幾田) ありがとうございます。実際に学生の声の中で、教室に行かないでいいからオンラインの方がありがたいという声がありました。それは自分の時間のおり進められるからという面もあるのですが、教室という人と関わる環境が重荷になる学生がいるということも事実です。一方で、同じ授業で人と会ったからこそ良いと考えている学生がいたというのも事実です。

同じ授業でも、受ける学生によって、その場を良く捉える人も辛く感じる人もいるということ、そのメリットとデメリットを私たちが考えてわかった上でオンラインという形を使い分けて行くことが必要だと思いました。たとえば、15回の授業の中にオンラインの回を何回か設けるなど、そのようにして本当はどうすればいいのかを模索していくしかないのかなと思いつつながら、先ほどの余郷先生と佐古先生のお話を伺いました。今日はありがとうございました。

(司会 梅津) ありがとうございます。宮口先生、お願いします。

(宮口) あまり良い意見はないんですけれども、今年の春にオンライン授業を4~5回やって、そのあと初めて1年生の授業を対面で始まった時、行った時に「皆さん初対面ですか？」と聞いたら、もう既に関わり合いになっているような感じで、もう何度も会っているとかいう話だったんです。

なので、そういう意味では人間関係を作るのが大変なんじゃないかな、と思ってすごく心配はしてはいたんですけど、ある意味学生はすごく頼もしいというか、しっかりしていて、いつの間にかそういう人間関係を自分たちで作っていたというようなことを思い出しました。

オンラインですごく大変なんですけれども、学生は学生でやはりすごくしっかりしたところもあるので、そういうところを頼りにして、何がサポートできるのかというのを我々は考えていけばいいのかな、という風に思います。

(司会 梅津) ありがとうございます。では、山田先生、お願いします。

(山田) 先ほどの余郷先生からのお話に合う事例かわからないんですけども、ちょっと今、4月ぐらいに初めて moodle、それから Teams を開けた時の驚きを思い出しました。あれだけのものを使いこなしているところが、要するに私自身、本当はグループワークだとかアクティブ・ラーニングみたいなことを実際やりたいなと思ったのですが、そういったものは実は揃っている訳ですね。

ああいったものを結局ちょっと使い方がわからない、使いこなせないということでやってなかったんですけども、ですから今回の FD も Teams を何に使っているか、単にオンライン会議システムとしか考えてない。本当は Teams だとか moodle の持っている可能性というのは、ものすごいものがあると思います。

特にやっぱり若い子、デジタル世代の人たちというのは様々なツールを使って、色んな結び付き方をしている。我々はだからちょっとその意味で我が国の教育は、デジタル化において周回遅れだとよく言われますけれども、やっぱりあれだけの Teams だとか moodle なんかをきちんと使いこなせるような教員にならなければ、50 過ぎて辛いんですけど、やっぱりそこら辺の研修みたいなこともやっていく。だから、やはり見ていると、これをどう使うのか想像がつかない訳ですね、我々、そういったものがわからないと。だからそういうのが学習できる場を、またどこかで考えていただければと思っております。

(司会 梅津) ありがとうございます。まだまだご質問・ご意見あるかもしれませんが、定刻がまいておりますので、これでいったんディスカッションを締めくくらせていただきます。

最後に、FD 委員会の副委員長、小坂先生からご挨拶をいただきたいと思っております。お願いします。

(FD 委員会副委員長 小坂 浩嗣 教授)

先生方、どうもお疲れ様でした。それから、オンラインで聞いている先生方も長時間にわたりどうもお疲れさまでした。オンラインの方はそれぞれ研究室で暖かい部屋で聞いていてよかったのじゃないかなと思っておりますが、こちらの講堂は非常に底冷えがしているような状況です。

それぞれ4人の先生方から発表いただいたのですが、オンラインで聞いている先生方も、私も含めまして今回オンラインの授業を作って、実際にやってみて、これは本当に大変だな、というのを皆さん実感しているのじゃないかなと思います。

更に、本当にこれで学生はちゃんと学んでいるのかな、その辺の手ごたえも非常に半信半疑の状態ではないかなと。でも、これから先、こういうような方向で、これから教育が進んでいくのだろうか、そう思うと不安も多いのじゃないかなという気がしていました。

ただ、今日の4人の先生方に代表して発表いただいた中で、私も感じましたのは、先生方お一人おひとり、それぞれご苦労する中で色々作っていただいている時に、あるいは授業をしていただいている時に、おそらく頭の中に学生の顔を浮かべて作ったり、授業をやられていたのじゃないかなというのを思いました。

一方、学生の方も先生方がそうやって力を入れて作ってくれたのを聞きながら、先生方の顔はどんなかな？どんな先生かな？というのをイメージできたのかどうかというのを、私は非常にポイントだなと思いました。

要はどういうことかという、確かに技術とかあるいは道具というのも大事ですけども、私は臨床心理学を研究していますので、教育は人と人が教え学んでいるという、この関係がやっぱり大事なかなと思います。カウンセリングでも言いますが、やはり共感の原理が上手く働けば、オンラインだろうが対面だろうが上手く進めることの可能性があるのじゃないかな、というのを思いました。

とは言いながら、先ほどの議論にもありましたようにオンラインでいくのか、いやいや対面でやった方がいいのじゃないかという、この議論はまだまだ続くと思います。しかしながら世の中は、どちらかと言えばオンラインの方に進む風が吹いているような気がします。それを対面でとなると、かなり逆風の中で考えていけないといけない。もう亡くなられましたけども、臨床心理学の河合先生は「180度変わるのは簡単ですけども、20度・30度変えるのは大変やで」ということをおっしゃっています。

そういう意味で、これからしばらくはオンラインと対面をそれぞれのメリットを生かしながら、あるいは課題を改善しながら進めていくかという、この苦しさというのは当然、伴うのかなと思います。先生方もそうですし、学生もお互いにそういうことを意識しながら、これから教え、学んでいけたらなと思っています。

さて、最後になりますけれども、令和4年には本学でも教職大学院で遠隔教育プログラムがスタートすることになっています。そういった形で益々先生方、あるいはこれから入学してくる方々も、このオンラインと付き合っていく必要があるかと思います。是非この機会をスタートにして、また先生方だけではなくて、今度は学生も含めるようなシンポジウムができたらいいなと思いました。なかなかこれから大変な道のりかもしれませんが、皆さん共々頑張っていけたらなと思って、私の閉会の挨拶に代えさせていただきます。今日はどうもお疲れ様でした。(拍手)

(司会 梅津) 小坂先生、どうもありがとうございました。それでは最後になりますけども、フロアの先生方、それからオンラインでご参加の先生方も、登壇の4名の先生方に拍手をもって感謝の意を表したいと思います。どうもありがとうございました。(拍手)

それでは、これをもちましてFD推進事業を閉じたいと思います。先生方、遅くまでご参加いただきましてどうもありがとうございました。

おわりに

理事・副学長（教育・研究担当）大石雅章

教員養成大学として学校教育の課題など社会のニーズに応えるために、授業改善に努め教育の高度化を図らなければならない。FD推進事業はその中核的活動であり、学長のもとにFD推進委員会を設置し、全学的規模で毎年実施している。このFD推進事業は、個々の授業の改善のみならず、本学のカリキュラムの体系を検証する上でも重要な役割を担っている。

今年は、新型コロナウイルス感染症のために、授業は4月からメール等による課題の提供で行い、急遽オンライン授業実施に向けての体制作りをすすめた。その結果5月18日からオンラインで授業を提供し、対面授業は6月22日からとなった。なお、3密回避による教室の収容人数制限等から、一部の授業はオンラインで継続された。

このようなコロナ禍の教育活動を鑑み、FD推進委員会では、収束が見えない感染症や今後の5G新社会を踏まえ、開学以来初めて実施した全学一斉オンライン授業の検証を行い、授業改善に努めることが肝要であると判断した。

そこで、本年度のFD推進事業として12月2日に全学を対象にした「オンライン授業研究会」をテーマに実施することになった。オンライン授業体制を支えていただいた情報基盤センター所長の曾根直人准教授、オンデマンド授業での教材活用から宮口智成准教授、実技授業の実践から山田啓明准教授、学生アンケートの調査分析から幾田伸司教授がそれぞれ報告し、実のあるものとなった。

8月に実施した学生のアンケート調査の結果から、オンライン授業の限界と有効性が明確になってきた。オンライン授業は、先生や受講生との議論を交わすことが難しいが、オンデマンドの場合には時間に左右されず、また理解困難なところは何回も聞き直すことができ、知識や技能を習得する上では利便性が高いことが分かった。

今後のカリキュラムでは、対面の授業を核としながらも、対面・オンラインのそれぞれの利点を活かした、ハイブリット型の授業へと進んでいく可能性がある。

このFD推進事業「オンライン授業研究会」の検証を、今後の授業改善に大いに活かしていただきたい。

最後に、今回のFD推進事業に協力していただいた教職員に感謝申し上げます。